

入選

篠原 留衣 (しのはら るい) みなみ野小中 (みなみ野中) 2年生

作品名:「一番の幸せ」

図 書:ありがとう私のいのち

私には、手や足があり、自分の意志で動かすことが出来る。

「こんなこと当たり前ではないか。」

私はこう感じていた。この本に出会うまでは。あるいは、眼光紙背に徹する読み方をするまでかもしれない。しかし、この本と出会ってからは、私の普段と全く変わりの無い生活が深みのある充実したものへと変わった。

「冬があり、夏があり、昼と夜があり、晴れた日と雨の日があって、ひとつの花が咲くように悲しみも苦しみもあって私が私となってゆく。」

この本の作者。星野富弘さん。この本には、富弘さんの人生の経験や富弘さんの描いた絵画、読者への力強いメッセージがつづられている。そんな力強いメッセージや富弘さんのエピソードに私は心を打たれ、衝撃を受けた。

その中の一つに「空が変わった」という表現がある。富弘さんのプロフィールを見ると、二十四歳の梅雨の時期から人生がまるで天と地のように激変している。富弘さんは、中学生の教諭になるが、クラブ活動の指導中に頸髄を損傷し、首から下の運動機能を失っていた。二十四歳という教諭なりたての時期だった。そこから苦しい九年間の入院生活が始まった。結局、襲ったケガは治らず、首から下の運動機能は完全に失った。たった一つの出来事が自分の今後の人生を変えるような大きな事故へと変わってしまった。富弘さんは梅雨の時期になると、

「あれがなければ俺の人生は違っていた。あの日を境に夢も希望も全て失った。」

と語る。ここから、普段の生活が当たり前ではなく、いつ自分の人生が急変するか分からないと感じることが出来た。

もう一つ富弘さんの経験に衝撃を受けたことがある。それは、富弘さんの絵についてだ。

みなさんは、美しい絵を見た事があるだろうか。花や草などの植物で、繊細な線まで筆の先を使って描いたり、絵の具などの色を使い鮮やかに描かれ

た絵を。

絵には、人を幸せにしたり、楽しませたり。そんな魅力があると私は思う。そんな絵には、鮮やかさを出すインク類はもちろん、繊細なところまで描きあげる筆などの道具は、必需品となる。その筆を持つのには手が必要である。「こんなことは当たり前だ。」

そう思っている人が多くいると思う。私も初めはそうであった。でも本当に当たり前なのだろうか。私はページをめくり、はっと息を飲んだ。私の考えは変わった。富弘さんは美術館を作り上げるほどのたくさんの絵を描いている。首から下の運動機能を失っている富弘さんは口で絵を描いているのだ。そこで私はペンを口に咥えて実践してみた。私は吹奏楽部に入っているため、通常の人よりも口は使うから少しばかりは出来るかもしれないと試みた。しかし、絵を描くどころか文字も書けなかった。私はこの実体験を得て、富弘さんのすごさはもちろん、体が不自由になってから絵を書こうと思ったことやあきらめずに描き続けたことに圧倒された。

私はこの本を読み終えて当たり前と思っていることは一つも無く、その当たり前だと思う気持ちから当たり前では無くなる可能性もあるのだということに気付かされた。

首から下が不自由となっても自分の出来ること、自分にしか出来ないことを探し続け、あきらめずに前向きに生きていく富弘さんの姿を感じられて、生きていく勇気や生きていくことの大切さを感じることが出来た。

普段何げなく生活する日常が幸せであるのも、当たり前である。こんな考えを覆してくれた。もしかしたら、その一日を何げなく幸せに生活出来ることが一番の幸せなのかもしれない。

いつもと変わりのない一日一日が、この本に出会ってからは、その一日を大切にかみしめて、一番の幸せを感じられるようである。